

第三節 丸山豊散文抄録

丸山豊氏の詩集などの著書目録は第二節に掲載しているが、氏がさまざまな形で発表された散文のかなりの数が『定本丸山豊全散文集』（創言社、一九七八）に収録されている。しかし、未収録もかなりに上ると思われるが、今回、丸山氏が「連文活動を中心とする文化運動の渦のなかに、じぶんの青春のほとんどすべてを投入してしまった」という久留米連合文化会発足以前の、久留米の文化運動を述べた「緑の追想—久留米の文化運動について」の文章は会報という性格からあまり知られていないこと、あわせて戦前・戦後の久留米の文化運動を語ると共に、氏の文学活動を自叙的に述べたものとして貴重な内容をもっており、今回全文を紹介することにした。

これらは久留米連合文化会の機関誌『連文会報』に十一回にわけて連載されたものである。昭和五十一年七月発行『連文会報』第五号から昭和五十五年七月発行第一七号に分けて連載されている。

緑の追想 — 久留米の文化運動について—

久留米連合文化会顧問 丸山豊

『連文会報』第五号（昭和五十一年七月発行）

○まえがき

『連文会報』の編集者南熊太氏から、久留米連文発足のころの思い出をまとめてみたというおすゝめである。昭和二十四年の発会から今日にいたるまで早くも二十七年が経過したわけで、じつはその間にいくたびも、追想記をしたためるように誘いがあった。そのたび私は、一種の気うとさをおぼえて、筆不

精をきめこんだ。ひとつには、当時の記録がほとんど手もとから消え失せているからでもある。たぶん中途で一まとめにして久留米の教育委員会に手わたしたと思っているが、委員会のところで紛失したものか、私の思いちがいであるか、詳らかでない。しかし、それよりも重要な筆不精の原因がある。私たちの追憶というものは、歳月とともにあやふやになり、しかも、じぶんと直接結びついた部分だけが風化から残る、つまり、じぶん本位に歪んでしまうことを知っている。私のおぼろげな追憶をまとめるのが、かえって将来の誤伝のもとになるかもしれないとおそれたからである。なおまた、敗戦後南方から帰国した私にとって、昭和二十一年から二十七年までは、連文活動を中心とする文化運動の渦のなかに、じぶんの青春のほとんどすべてを投入してしまった、情熱的季節であった。それだけに、昭和二十七年連文の副会長を辞したときのほっとした気持ちだが、今日になってなお根深く残っているのだ。はげしい恋のあとの虚脱感のようなものである。

連文創立十周年の祝賀行事のおりも、回想記をたのまれたが、ていねいにお断りしたはずである。そのとき岸田勉氏が「連文の歩み」という文章を草してくれた。これは連文誕生のいきさつを要領よくものがたる、みごとに文章で、もうこれに追加する重要記事はないわけである。だから私としては、蛇足ともいえる補遺のかたちで、心細い記憶をたどってみることにしよう。連文の誕生には、その前奏曲というべき「久留米文化の会」のこと、さらにさかのぼって、戦前の久留米の文化運動のことから、記述してみたい。

（未完）

— 久留米の文化運動について— (2)

『連文会報』第六号（昭和五十一年十一月発行）

久留米における全市民的な文化運動の思い出について述べるのだから、『文化協会』とか『文化会』とか、りっぱな名称がついたところからペンをおこしてよいはずだが、文化運動というものとはそういう時点でびよこんと出発したわけではなく、さかのぼれば目がくらむほどはるかな先人の業績を川床にした幾条もの文化伝統のながれが集って、はじめて組織立った文化運動の大河が形成されてきたことは、あらためて申すまでもない。その証を郷土史の上から拾いあげるのはかならずしも難かしくないが、私はすこし方法を変えて、私がまだ久留米の芸術について関わりをもたなかったころの、すわち少年時の文化的環境をうすらいでゆく記憶のなかからたぐりよせることからはじめてみたい。

戦前の久留米は、あるいは軍都とよばれ、あるいは商業の町とみなされてきたものの、文化・芸術の面についても、かなり豊沃な土地柄だったと考えられる。そのころ、久留米の中心繁華街は三本松町であり、ここから米屋町へ曲ったばかりのところ、西日本一の大書店菊竹金文堂があり、その向い側に蟠龍堂書店があった。金文堂は新を追う性格がよく、蟠龍堂は着実に旧を守るといふ違いがあったが、この二つの大書店はあきらかに久留米の文化センターの役目をはたしていた。ことに金文堂は私たちにとってありがたい存在であった。たまたま金文堂が火災をおこしたときは、書籍を通じてなにくれと恩恵をうけていた多数の学生たちがいち早く消火にかけつけて、町の美しいニュースとなったものである。災厄をうけた金文堂は、当時めずらしかった鉄筋建三階の新社屋にあらたまり、屋上には小ぎれいな喫茶室まで設備していた。番頭さんの恰好だけは相変わらず前垂れ姿。客に対しておどろくほど親切だった。私たちはまるで図書館にでも通うつもりで、その商売気をはなれたあ

たたかい空気にひたつた。立読みの一冊がおわると、顔なじみの番頭さんが、高い棚からつぎの一冊を取りだしてくれた。

数年後に、野田宇太郎さんが処女詩集『北の部屋』を刊行したときも、私が詩集『よびな』を自費出版したときも、それらパンフレットよりもうすい小詩集のために、金文堂は店頭正面に、自発的に畳一枚ほどの大看板を無料でかかげてくれた。さて、蟠龍堂は戦火によって消え去ったままだが、金文堂の方は店主の名こそ変れ、いまでも繁昌をきわめている。創業が文久元年と聞くから、今年で百十六年の歴史をかさねたことになる。おそらく日本でもっとも由緒の古い書店であろう。戦後早々の金文堂の、文化運動への熱意ある協力については後ほどまた述べることにする。

(未完)

—久留米の文化運動について—(3)

『連文会報』第七号(昭和五十二年三月発行)
若いとときの私は、久留米の文化状況を問われたときに、不毛地帯と答えるのがくせであった。それは、青年らしい文化への乾きと焦慮を示すとはいえず、ふるさとのすぐれた先人たちの、文化についての並々な営為について、まったく礼を欠いた言葉であった。

私たちの今の仕事、さらにこれからの仕事、すべて、先人の煉瓦づみを引きついでものであることは申すまでもない。久留米の文化史としての、音楽のこと、絵画のこと、また文学のことなど、私より年長のひとのペンで、ことに郷土史に専心される記述者によって、もっとたしかかな記憶と資料をもとに、くわしい整理が行なわれるだろうが、私は私のおぼろげな追憶だけをたよりに、小走りにたどってゆこう。

昨年の秋、九州沖繩文学賞の選考で久しぶり牛島春子さんと

会ったおり、話は久留米のむかし話になった。そして、久留米高女の音楽教師であった毛屋平吉さんの名前がでて、毛屋さんや、筑後新聞にいた萩尾さんや、のちにランタイシッキ工芸家としての後半生をえらんだ古川潤二さんたちによって経営された共鳴音楽会が、久留米の音楽普及に果たした役割を語りあった。あの頃は散歩の道すがら、レコード店の前に共鳴会の公会堂における演奏会の立看板を見て、ひそかに胸をおどらせたものだ。

公会堂といえば、藤原義江や関屋敏子らの独唱会もいくたびか催された。その魅力的な歌唱が、いまもありありと心に刻まれている。テレビもラジオもないときに、一流の芸術に接したときめきは、今日十代の若者が歌手たちをめまぐるしく送迎する熱狂とは、まるきり異質のもののように思えるのだが。あの種の音楽会を主催し、厄介な事務をとりしきって、ふるさとの音楽を啓発してくれたのは、どなたたちであつたらうか。あれも共鳴会の主催であつたらうか。

久留米のドンタクは招魂祭であつた。もともと、諸戦役の戦死者たちの霊をなぐさめることを主にしたもので、あわせて軍と民間との融和をねらうのであつたらうが、そうした主旨はさておいて、久留米の町がわきかえる楽しい祝祭であつた。この機会には年少の私たちも、町々のにわかづくりの舞台で、粋筋のすぐれた邦舞を見ることができた。もちろん、このドンタクには、新旧巧拙をとわずさまさまの大衆芸がめじろ押しのもので、ときにはおどろくほど前衛的なものもあつた。たとえば、新聞くぼりの荒川君など、ルパシカをまねた衣裳をつけて、ツルゲネフの詩を朗読したり、今日の暗黒派風な舞踊をいち早く披露したりした。

邦舞はまた、小頭町の恵比須座の年一回の温習会で堪能することができた。幼年時の藤間天津雄さんの才分ゆたかな舞踊に

ほとほと感心したのも、この恵比須座ではなかつたらうか。たしか子猿に扮しての熱演だつたと思うのだが。この劇場で石井漠、寒水多久茂たち、公会堂では石井小浪の洋舞の公演も印象ぶかいし、映画クラブという映画館の幕間狂言のかたちで、素足に日和下駄をはいて踊つた岡田嘉子の踵のしるさが記憶にあざやかである。その直後に彼女は、国境をこえてソ連へ逃げた。

(未完)

—久留米の文化運動について—(4)

『連文会報』第八号(昭和五十二年八月発行)

久留米の美術レベルの高さについては定評がある。それが青木繁さん・坂本繁二郎さん・古賀春江さん・豊田勝秋さんらの大きな業績によることはもちろんであるが、伝統をもつ洋画グループ来目会の存在は特筆されてよい。

ビルマで戦死した画家石原寿市君を同級生にもつて、日吉小学校から明善校に進学したばかりの私の友人には、のちに美術批評家として名をなした河北倫明君あり岸田勉君ありまた後日画商のみちをえらんだ久我五千男さんが近くに住んでいて、私じしんも、河北君や、航空兵として戦死した藤島清君のすすめで中学の絵画部にわずかの期間ながら入部して、山村秀一先生の指導をうけるなど、とかく絵画と縁があつたが、来目会についての認識はまだあさかつたようである。

ただ、うすれゆく記憶のおくに、来目会展を見にいった私があるけれど、それが小学高学年であつたか、中学生の時であつたか、どうもはっきりしない。たしか新町の一丁目、不動銀行のななめ前に、塩・タバコなどの専売業務をとりあつかうところがあつて、このせまい事務室で展示されていたようである。会場に足をふみ入れたばかりの壁面に、少年川原貫一君の絵が

がかかげてあった。「神童貫ちゃん作品げな」と、ささやきあったものである。その後商工会議所での来目会展も鑑賞したような気がするが、これはまずまず記憶に霞がかかっている。

中学も三年になったころ、辻重行君という同級の仲よしがいた。かれは芋抜川町の有名な大野うなぎ屋の令息だった。かれの家の床の間には坂本繁二郎さんの画幅が下っておりその高名は承知していたので、おそろおそろ拝見しては神品にふれたため息をついたのを覚えていいる。画題は静物、たぶんかぼちゃ。枯淡に墨でえがいて、うっすら色どりをしてあったようだ。季節がかわっても、この画が他の絵ととりかえられることはなかった。やがて、辻君の父君が大野米次郎さんといって坂本さんや丸野豊さん、松田諦昌さんたちとともに、来目会の主要メンバーであったことを知ったものである。

以後、五、六年のあいだに、私は文学を通じて、数多くの美術家たちとの交誼をえた。坂宗一さん、伊藤静尾さん、内野秀美さん、片山摂三さんなど、その名をあげれば限りがない。

(未 完)

—久留米の文化運動について—(5)

『連文会報』第九号(昭和五十二年十一月発行)

さて、私の身辺で起伏した久留米の文学運動について、ありのままを記録しておきたい。井口外科の息子の宏君たちと『子供の科学研究会』を結成したりして、かならずしも文学好みではなかった日吉小学校時代の私が、教師や父のすすめもないのに童謡を書いたり詩をつくったりしたのは、当時の雑誌『日本少年』の投稿欄の刺戟もさることながら、久留米における川原みくささんの熱心な児童詩運動の影響がつよい。みくささんは私費をなげうって、久留米全域の児童の童謡や詩を採録した冊

子を発行しておられた。

明善校に入学してからは、いくたびか田中彦影先生宅の句会に出席してみた。そのころ静雲の『木屋』に投句していたから、当然ホトトギス派の句会に顔をだすようになったわけである。もちろん参会者の最年少として俳人の皆さんにかわいがられたが、彦影先生からは、「どうも早熟すぎて」というふうに見られたらしい。「俳句に凝りすぎると医者になれないぞ(家の職業が医師だったから)」と笑顔ながらではあるが叱られたのを忘れもしない。一年以上級の石田光明さんからすすめられるまま、天の川句会に一回だけ出席している。櫛原町だったことだけ覚えていたがどなたのお邸だったかまるで記憶にない。光明君の「春の蚊の硯の上に玲瓏と」といった優婉な作に感服していたころである。

詩の話に移ろう。私が文学と無縁のとき、すでに久留米には、のちの九大の国文学の教授をされ、私もおつき合いをすることができた福田良輔さんらによって文学同人雑誌が刊行されたこと、また私が中学に入ったばかりのころ、牛島春子さんの令兄らによって文芸誌が出されたことなどは、後日知りえたわけで、私がじかに接した最初の同人雑誌は『街路樹』である。明善校を四年に進級したばかりの私を親友の井上光臣君が『街路樹』を企画している有志たちに紹介してくれた。私はこつこつ詩を書いていたし、井上君はすでに渋味のある小説を作っていた。詩稿をふところに、光臣君に案内され日吉町電車通りの青木酒店に青木勇さんを訪問した私は、その蔵書のゆたかさに圧倒され、同時に同人としてのテストを受けたのである。

『街路樹』は昭和五年六月一日に創刊された。そのバックナンバーはありがたいことに鶴久二郎さんの努力によって保存されており私もそれを拝借して記憶をたどることができるわけだ。

発行所は三本松町街路樹社、発行者は江藤九州人となっている。三十頁。一部十銭。創刊のおり同人は十五名で、阿緒樹とあるのは青木勇さん、江頭翠峰というのは九州人さん、晴山純というペンネームをつけているのは私である。私の場合まだ中学生なので学校に遠慮して名を秘したが、第三冊あたりから本名を使用している。『街路樹』の詩の方の中心人物となったのは青木勇さんであり、短歌では江藤さん、また詩の顧問格に鹿児島出身在東京の江口隼人さん、短歌の方は江口忠太さんを特別指導者の位置にすえていた。この雑誌の創刊が、当地方の文学興隆期のいと口にのぞんでいたものと見え、たちまち同人数は増加し、久留米における最初の文芸大集団を形成したのである。しかも東京・大分・浮羽・神崎・瀬高など九つの支社をおくことができた。青木酒店と、三本松の丸万マーケットの中央にあった江藤商店には、毎日毎夜文学青年があつまつた。青木さんは三十才位だったと思うが、全同人のなかの最年長、当時からなかなかの奇人で昼の入浴時間、その間浴槽にもたれてたっぷり午睡をとるのだった。読書量のおびただしさと、飛躍の多いどもりながらの独特の語り口によって、私たちの敬愛的になつていた。江藤さんの店は衣服や洋傘などの商品がいっぱいあつて、座る場所もないので、店の横の階段を下駄をならしてかけ上つて、ひろい丸万食堂にたむろするのである。風態あやしき青年たちが、食堂が閉まるまでにぎやかな議論を交わし、その後は深夜の路地のドブ板をふみながら、文学の熱気に酔うのだった。『街路樹』の作品としては井上改造の短歌、鹿迪介、大石千芝・井上光臣・安西英雄の小説、阿道夫・久富虎緒・永井正春の詩などが胸に刻まれている。野田宇太郎さんの詩の登場も特記すべき事項のひとつである。

(未完)

—久留米の文化運動について—(6)

『連文会報』第十号(昭和五十三年三月発行)

市民が文化的意志をはたらかせて、音楽とか美術とか文学とかのワクをはずした会をもとうとするのは、今日ではありふれた試みであるが、戦前にはきわめてめづらしいことであつた。もつとはつきりいえば、私のせまい知見では久留米地方でのはじめの会であり、日本の各都市にもその例をもたなかつた。もちろんその教科書がないわけではない。長谷川巳之吉の第一書房から「セルパン」という文化雑誌が刊行されていて、誌上でさかんにフランスのN・R・Fの運動を紹介していた。それは政治暴力におかされて危殆に瀕したフランス文化をまもるための中ひろい文化運動であつた。国規模のあの大きな運動を真似て、久留米という地球の小さな総合文化団体が発足する。昭和九年一月、私は会の名をリベルテの会とさだめ、まず私が在学中であつた九州医専の内部で、自由主義的な学生があつまり、これに志を同じうする町の青年たちが結びついて、会の輪廓をつくつた。事務所に当てるべき適当な場所がなくて困つたところ、そのころ紺屋町の角に茶房「ゴッホ」をひらいた画家内野英実(内野秀美)さんの賛意を得て、ここを無料で事務所として借用することにした。内野さんと私との生活の友誼はこのときはじめたわけである。昭和十年の三月には、私は会の言葉としてつぎのように起草している。

——ともすれば良心は圧迫され民意は歪曲されている。現代の世潮を、注視し考察し研究し、文化財をその敵から護るために、一九三五年一月四日私たち青年はリベルテの会と言うクラブを結びました。併し何分当地方は従来殆んど文化的な団体を有せず、僅かに地方エピソードに依る独善主義的文学青年

の集合、それから秀抜な先覚を多数東京へ送っているに拘らず一向に成長しない絵画人グループ、かつては日本最初の農民劇団を有していた光栄を失つて企てる度に失敗を重ねる新劇協会、その他小さな音楽のグループを有するのみで、都市の第一要素である図書館すらないと言う商人主義の極端に浸潤した地方であり、それに近來は学校教育法が幾分時代逆行の感があつて私たちより幼少の青年には殆んど期待をかけることが出来ず、発会より今日に至る迄会の進行は大変困難な経過を通つてまいりました。けれども兎に角主宰者無し細規無しという珍しい構成のもとに、各自の良心による輪と進歩的主知的な精神による不文律とにより結ばれて、お互いの中には学校生徒も居ますこととで少し奇矯過激を排し出来るだけ平静な計画をたてて、会の使命を遂行しようとしているものです。勿論英雄主義の集會や孤禪の団体ではありませんので会の名の為に行うとか会を所謂盛會にするとか会員中にヒットラア君をおくようなことは最も排撃している次第です。本会の主旨として反ファシズムであることは最も穩健な意味に於いて公言することを許されると思ひます。徒らにヘゲモニーへ反抗してみると言うようなそんな偏矯安価なものではありません。以上の意をよく了解されて少しでも文化學術に就いて関心をもたれる当地方の諸兄があるならば快よく私たちの輪の一つの鎖になつていただかれんことをお願いいたします。

一九三六年三月

人民良心と人格自由の名において

久留米リベルテの會

当時の假名づかいのまま転記してみた。氣負いが鼻につくずいぶんの悪文だが、あの社会情勢のなかでの輻晦を示した文章としてお目こぼしをねがいたい。

会の推移については、昭和二十一年になつて、某新聞紙上に私が書いた一文がある。

「昭和九年、前衛的な芸術および政治の諸団体はほとんど解散のうきめにあい、わずかに実践的な分子のみ地下にひそんで当時のヘゲモニーに抵抗をつづけているとき、私たち医学生の一部は文化的な市民とむすんで「人民の良心と人格の自由」なる名において、一切規約というものをたぬ文化団体リベルテの會をひらいた。画家も学生もシネマの弁士もそれから労働者も諸人も会社員も、おたがいの年令職業などの相異をかなぐりすてて結合し、会員数はときに百五十名をこえ、詩歌展、絵画展、演劇研究会、出版、映画研究会、舞踊研究会などと文化のあらゆる方面にほしいままな仕事をした。——このリベルテの會は発会から三年目に、官権の槌を蒙らぬ前にさつさと解散してしまつた。」

いま私の手もとに、リベルテの會の機関誌「仕事部屋」の第二号だけ残っている。これをひもときながら、会の行事のいくつかを想起してみたいと思う。（未完）

—久留米の文化運動について—（7）

『連文會報』第十一号（昭和五十三年七月発行）

前回で私は、リベルテ會報「仕事部屋」のうち、いま手元にあるのは第二号だけと書いたが、その後、若松の婦人科の医師村岡正高君が第一、第三、第五号を保存していることを知つた。さっそく拝借して、私の記憶のうすれを補うことにした。

昭和十年十月二十日が第一輯の刊行日になつている。編集者名は九州医專の私の同級生であつた台湾生まれの黄海東君。村岡正高君も黄啓東君も、のちの「文学會議」の同人である。発